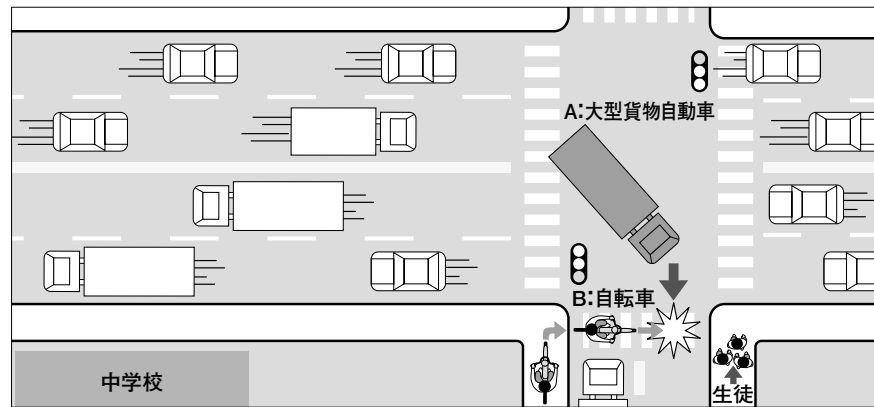


# 職場における交通安全指導

Part 82

## 交差点を右折する際、横断中の自転車に衝突



### ■事故の概要

- 発生日時  
日 時：平成22年9月某日 午前7時30分頃  
天 候：曇り
- 道路状況  
片側二車線の市街地道路
- 事故の当事者  
運転者A（大型トラック）：32歳、男性  
被害者B（自転車）：70歳、男性
- 被害状況  
A：サイドバンパー微損  
B：左足首骨折、全身打撲（全治3か月）

### 事故状況

Aは運送業での乗務歴は2年足らずであるが、以前に他の職場で大型車の運転経験があったことから、入社当初から大型トラックに乗務し主に鋼材を搬送する仕事をしていました。

行動は機敏で明るい性格のAだが、やや慎重さに欠けるところがあり、入社直後に2件の軽微な物損事故を起こしていた。

当日Aは、建設現場へ資材を搬入するため、早朝から荷物の積み込み作業を行ったが、思いのほか時間が掛かり、予定時刻をかなりオーバーして出発した。

目的地に向かう幹線道路は朝のラッシュ時間帯で、発進・停止の状態が続き、事故発生地点付近に差し掛かった頃には、現場への到着時間の遅れが気

掛かりでかなりイライラしながら運転していた。

前方の交差点を右折するため第1通行帯から第2通行帯へ進路を変え交差点の中央へ出たが、対向車が途切れなく、一旦停止し、右折のタイミングを待っていた。

進路右前方の歩道上では、登校途中の生徒数人が道路にはみ出さんばかりに戯れながら歩いており、その生徒達に警戒心を抱いた。

そのうち右折が可能となり発進したが、進路上の横断歩道には人影が見当たらなかったことから、その先にいる生徒達に視線を転じ進行を続けた。

横断歩道直前に差し掛かった瞬間、目前に人影が迫ってくるような気配を感じたため、慌ててブレーキを掛けたが間に合わず、自転車に乗って横断歩道を渡っていたBを跳ねて転倒させ、重傷を負わせた。

自転車のBは、いつもの日課である公園での早朝散歩を終え自転車で帰宅途中、信号で停止中の大型トラックの脇から青信号の横断歩道を渡り始めたが、途中から「点滅」に変わったため、急いで渡っている状況であった。

この事故の原因は、Aが交差点を右折する際、歩道上で戯れていた生徒達に気を奪われ前方注視を怠ったまま走行したため、自転車に乗って横断歩道を渡っていたBの発見が遅れたことにある。

一方Bも、道路横断を急ぐあまり、ことさら前方だけを見ていたため、周囲への警戒がおろそかになったことも、事故を招いた一因として挙げられる。

### 安全指導

#### ① 焦りに注意

運転者が交差点を右左折する際、何より注意しなければならないことは、横断者の有無、そしてその動向の把握です。

当時のAは、到着予定時刻をかなりオーバーすることが予想されたことから、急ぐあまり焦りが生じ、イライラが募って冷静さを失い、注意力が散漫な状態でした。

その結果安全確認が足りずに、事故を起こしましたが、横断者に対する、「危険認識が甘かった」と言わざるを得ません。

焦って冷静さを失うと、自己中心的な運転に陥りやすくなり、そのため警戒心も希薄となって自転車や歩行者を見落とすことが多くなり、重大事故を招く危険性も高まります。

冷静な運転ができることも、プロドライバーの条件です。

運転者は、日頃から体調を整え、時間に余裕を持ち、そして気持ちにゆとりが持てるように十分に配慮し、「平常心」で冷静な運転ができるよう心掛けましょう。

#### ② 高齢者の行動に配慮した運転

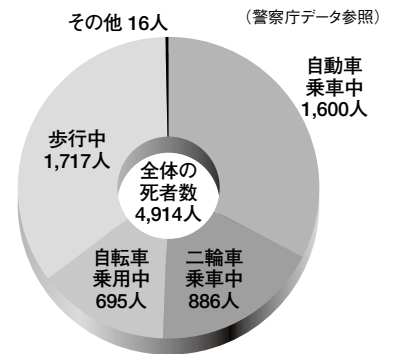
昨年、全国における交通事故死者数は4,914人でした。自転車乗用中の死者が695人（14.1%）で、そのうち65歳以上の高齢者が445人（64.0%）と約3分の2を占めており、高齢者が自転車乗用中に重大事故に遭う割合が高くなっています。

一方、貨物車による対自転車事故は、その約80%が市街地で発生し、しかも当該事故のように高齢者が自宅近辺で横断中に被害に遭うケースが多くなっています。

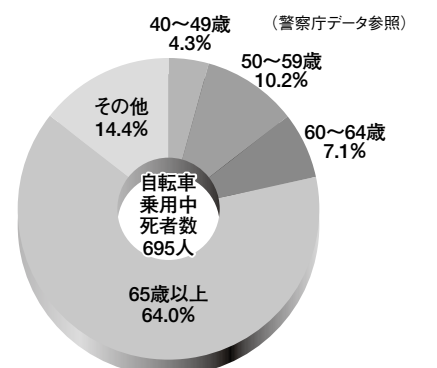
高齢者は、いつも通り慣れた自宅周辺では、警戒心や安全への見極めが甘くなり、特に横断中は、「車の接近に気付かない」、「視線が足下に偏る」、「クラクションが聞こえない」などから、予想外の行動に出ることがよくあります。

運転中は、高齢者の行動特性をよく理解し、細心の注意を払って人に優しい運転を心掛けましょう。

#### 平成21年 状態別死者数



#### 平成21年 自転車乗用中の年齢層別死者数



#### ③ 右左折時の注意

昨年、全国で発生した自転車事故は156,373件、その内交差点事故が113,761件（72.7%）を占め、中でも対車両との「出会頭事故」が71,732件（63.1%）、「右左折事故」が31,178件（27.4%）となっています。

トラックのように「死角」が多い車両特性を考慮すると、交差点の右左折時は「死角」に入り易い歩行者や自転車を見落とす危険性が高いため、最大限の注意が必要です。

運転者は、常に運転に集中することが大切ですが、現実にはなかなか困難であり、おのずと集中の度合にもメリハリが必要であると考えます。

人の体に「ツボ」（大切な所＝急所）があるように、車の運転においても「安全」のため注意を集中させる「ツボ」があります。

交差点は、いろいろな事故の危険要因が潜んでいるところであり、まさに「安全」への「ツボ」を押さえなければならない場所です。

交差点で右左折する際は、危険意識を強く持ちフルに注意力を発揮して、安全確認を徹底するよう心掛けましょう。